

小沼丹「黒と白の猫」の表現

水 藤 新 子

- <目 次> 1 はじめに
2 分析の対象
3 「黒と白の猫」に見られる表現の諸相
4 おわりに

1 はじめに

小沼丹（1918～1996）は英文学者・翻訳家であり、小説家・随筆家でもある。明治学院在学中、短編「千曲川二里」の掲載された『白金文学』を井伏鱒二に送ったところ、思いがけず感想を記したはがきを受け取った。意を決して住まいを訪ね、以来師弟関係を結ぶ。

早稲田大学文学部英文科に入学し、『早稲田文学』同人となる。戦時下の繰り上げ卒業後は教員として身を立て、戦後新制大学発足に伴い早稲田大学で教鞭を執るに至って改めて執筆を始めた。この時期に書かれた「バルセロナの書盗」（1949）は19世紀のスペインを舞台に、稀覯本マニアによる殺人事件を扱った作品である。

その後胸を病んで四年ほどの療養生活を経て、「村のエトランジェ」（1954）、「白孔雀のいるホテル」（1955）で芥川賞候補となり、江戸川乱歩の薦めで「クレオパトラの涙」（1958）といった軽いミステリー物も書いたが、妻の死の一年後に書かれた「黒と白の猫」（1964）以降はいわば私小説へと傾いていく。

作品集『懐中時計』（1969）で読売文学賞を、『椋鳥日記』（1974）で平林たい子文学賞を受賞している。その後は『小さな手袋』（1976）といった随筆集も交えつつ、着実な執筆生活を送った。

2 分析の対象

本稿で分析の対象とする作品「黒と白の猫」は、妻和子の急死からほぼ一年後「世界」（1964年5月号）に発表された。一連の「大寺さんもの」の第一作である。

随筆「十年前」によれば、「突然女房に死なれて、気持の整理を附けるためにそのことを小説に書こうと思って、いろいろ考えてみるがどうもぴった

り来ない」中で、「大寺さん、を見附けた」。「一体どこで大寺さんを見附けたのか、どこから大寺さんが出て来たのか、いまではさつぱり判らない」が、「僕」でも「俺」でも「私」でもなく「大寺さん」なる視点人物を得たせいで、「感情が底に沈殿した後の上澄みのような所が書」けたという。その後「揺り椅子」(1965)、「タロオ」「蟬の抜殻」(1966)、「古い編上靴」(1967)、「眼鏡」(1970)、「銀色の鈴」(1971)、「藁屋根」(1972)、「沈丁花」「入院」(1975)、「鳥打帽」(1977)、「ゴムの木」(1981)に至る12作品17年、「大寺さんもの」は書き継がれることとなった。

テキストは未知谷刊『小沼丹全集』第二巻を用いた。なお、引用文の表記については原則として現代仮名遣いとし、常用漢字については新字体に改めた。また、《 》内に示したレトリックの名称については中村(1991)に倣った。

3 「黒と白の猫」に見られる表現の諸相

A 妙な猫がいて、無断で大寺さんの家に上り込むようになった。或る日、座敷の真中に見知らぬ猫が澄して坐っているのを見て、大寺さんは吃驚した。それから、意外な気がした。それ迄も、不屈な無断侵入を試みた猫は何匹かいたが、その猫共は大寺さんの姿を見ると素早く逃亡した。それが当然のことである、と大寺さんは思っていた。ところが、その猫は逃出さなかつた。涼しい顔をして化粧なんかしているから、大寺さんは面白くない。

「大寺さんの家に、どこかの猫が無断で上り込むようになった」とでも書き出すのが尋常だろうが、いきなり猫の紹介から始まる。主人公である「大寺さん」がどのような人物かも、読み進めていかないとわからない。

主人公は「大寺さん」と三人称で描かれる。ただの「大寺」でなく、「さん」という敬称がつくのである。「妙な猫がいて、無断で我が家に上り込むようになった」でも、「妙な猫がいて、無断で大寺の家に上り込むようにな

った」でもよさそうだが、一人称にしないことで語り手との線引きがなされ、また「大寺さん」とすることで呼び捨てにするよりは近い存在として認めるといふ、独特の距離感が生じている。

「化粧」は猫にはお馴染みの言い回しで新しさはないが、「不届な無断侵入」になるとどこことなくユーモラスに感じられる擬人法として機能している。

小さなことだが、大寺さんの心理は「面白くない」のように、提示した概念を否定する形で表されることが少なくない。「不愉快に思う」のような直接的なもの言いではなく、逆を打ち消す一種の間接表現を用いるのである。

B 猫が何故上り込むか、その理由は間もなく判明した。三、四日して、細君が悲鳴をあげて大寺さんの所にやって来た。大寺さんは苦々し気な顔をした。

——頓狂な声なんか出すな。

——あら、御免なさい、と細君は笑い出した。あの猫が鼠を捕ったのよ。

——ふうん。

捕った鼠を啜えて、細君の坐っている直ぐ傍を通り抜けたから、細君は吃驚仰天して悲鳴を發したのである。猫が鼠を捕るのは当然のことかもしれないが、他人の家に上り込んで鼠を捕る猫がいるとは、大寺さんも考えなかった。大寺さんの家には鼠がいた。近所の家では大抵猫を飼っているらしく、鼠共は大寺さんの家に避難所を見出していたのかもしれない。従って、猫にとっては大寺さんの家は恰好の獵場だったのかもしれない。

会話文（心話文）の箇所「 」を用いず、——で始める。また、中途にたびたび地の文が挿入される。翻訳文体の影響が見られる表記法である。

「……から……のである」といった、過不足ない説明調の淡々とした描写が続く。また、全体的に接続詞の使用が少ない中、「従って」がより効果的な印象を与える。さらに、一段落の中に「大寺さん（の家）」が四回も用いら

れている。文章を書く際に注意すべきことの一つは合理的に必要な最低限な情報を提供することであって、そのために代名詞や指示語の類の活用が奨励される。職業作家でありながら捻破りな反復表現を用いるのは勿論意図的なもので、そうした工夫が何とも軽妙な滑稽感を生み出しているのではないか。

C 大寺さんと細君がそんな話をしているとき、猫は素知らぬ顔でお化粧品に余念がない。小柄な黒と白の猫であるが、黒が全体の三分の二ほどを占めていて、彼女は——因みにこの猫は女性であるが——人間にすると巴里の御婦人ぐらいには見えぬことも無い。そう思って見ると、器量も満更悪くないのである。

標題から「黒と白」とされているが、日本語の語順としては「白黒」とするのが一般的だろう（「黒白」は字音語であって「こくびやく」と読む）。ここでは「黒が全体の三分の二」であるという配分ゆえか、それとも英語における“Black & White”の影響か。

情が移って、呼称がただの「猫」から「彼女」へ、性別も「雌」とせずに「女性」としている。猫特有の仕草についても、Aでは「涼しい顔をして化粧なんかしている」だったのが、「お化粧品に余念がない」と、好意的とも言える表現に変わっている。

「見えぬことも無い」は《二重否定》、「悪くない」はやはりA「面白くない」と同じく《反対否定》のものの言いである。

D ——あの猫、知らん顔してたぜ。

ところが、細君の話に依って、猫の坐っていた家が彼女の飼主の家だと判った。尤も、細君も最近になって漸く飼主を知ったらしかった。大寺さんの細君は胸が悪くて余り出歩かない。自然、近所の事情にも疎いのである。

——ふうん、あの家の猫か……。

——あの奥さん、あの猫はもう勘当しましたの、なんて云ってたわよ。

——何故、勘当したんだ？

——知らないわ。

パリジェンヌは多分尻が軽いからだろう、大寺さんはそう解釈した。

もともと猫嫌いなものだから、外で会って知らん顔をされようと気にする理由などないはずが裏切られたかのような気持ちになり、細君（こちら猫嫌い）に「言い付けて」いるのは子供じみていて可笑しい。相変わらず「彼女」と呼びつつも「パリジェンヌは多分尻が軽いから」などと、随分失礼な憶測を述べている。振られた腹いせとは言え、「巴里の御婦人」からはかなり落ちた扱いである。

ここで重要なのは、細君が病身であることが非常にさりげなく示される点である。猫の消息を辿るようであるが実はその後の展開の伏線であることに、読者はまだ気付かない。

E ——うちの奴が猫好きでね。一度飼ったことがある。その猫が死んじゃって、もう飼わない……。

——うちと反対だな。奥さんはお元気？

——うん、まあまあと云う所です、と米村さんは些か改まった顔をした。急に快くなることも無い替りに、急に悪くなることも無い病気ですからね。君の方はどうなの？

——ええ、此方もまあまあと云う所です。

勤務先の先輩であり、気の置けない友人でもある「米村さん」と、飲み屋で会話を交わす場面である。それまでのくだけた口調が、それぞれの妻の病状に触れると自然と「些か改まった」ものとなる。Dで示された「胸」の状態は、けっして安穩と構えられるものではない、ということがわかってくる。

F 大寺さんは苦笑した。同時に、奥さんに猫の話をして聞かせている米村さんの姿を想い浮べた。大寺さんは、米村さんの奥さんを見たことは無い。しかし、米村夫人が心臓が悪くて、大分昔から殆ど臥たきりの生活をしているのを、米村さんから聞いて知っているのである。米村さんには子供が無い。病身で臥たきりの奥さんと二人だけの生活がどう云う

ものか、大寺さんにはよく判らない。しかし、病床の奥さんに猫の話なぞして聞かせている米村さんを考えると、多少は理解出来ないことも無い。

「子供が無い」「よく判らない」「理解出来ないことも無い」と、文末に打消を伴う形が繰り返される。しかし個々の文法的意味は同一ではないため単調さは感じられない。

「病身の奥さんと二人きりの生活は、さぞ静かで、寂しいものだろう。病床の奥さんに猫の話なぞして聞かせている米村さんを考えると、痛々しい気持ちになった」のような、「米村さん」の心情を忖度するような描写は敢えて持ってこないことで、むしろ余韻を残す表現となっている。

G 或るとき、若い女性の客があって、大寺さんが相手をしている所へ、猫が這入って来た。

—あら、とその女性は膝を叩いた。茲へいらっしゃい。

無論、猫に云ったので大寺さんに云ったのではない。猫はその女性の膝に乗っかると、眼を細くして咽喉を鳴らした。

—まあ、可愛いこと。名前、なに？

若い女性は猫に訊いた。自分が訊かれたのではないから、大寺さんは知らん顔して烟草を喫んでいた。

「若い女性の客」を横取りした猫への対抗心に、思わず笑みを誘われる。波線部がなくても一向に構わないのだが、妙に真面目で、ともするとくどくなりそうなこの言い添えが一種の軽みを生み出している。

この後「この尻軽猫め、余りいい気になるな」という立腹が続くのだが、それは心内語で声には出ていない。来客の前とはいえ、大寺さんは最早この猫に表立った抵抗ができなくなっている。「猫、お好きなんでしょう？」と水を向けられて初めて「いや、嫌いです」と「即座に答え」てはいるものの、力関係がすっかり逆転したかのような、何とも滑稽な場面である。

H しかし、この猫も一度だけ失敗をやった。猫に人を見る眼が無かったので、その相手は吉田さんである。

「～ので～である」の係り受けが不自然な、破格な印象を与える一文である。「しかし、この猫も人を見る眼が無かったせいで、一度だけ失敗をやった。その相手は吉田さんである」とでもするのが一般的であろう。

I しかし、大寺さんは米村さんを訪ねることが出来なかった。従って、将棋も指さなかった。と云うのは、それから二日後、当の大寺さんの細君が急死したからである。

米村夫人の突然の訃報を聞き、「慰める意味で」将棋を指す約束をしたのだが、思いがけず大寺さん自身の細君が亡くなってしまった。「しかし、大寺さんは米村さんを訪ねることも、将棋を指すことも出来なかった。実は／何故なら／というのも約束の二日後、当の大寺さんの細君が急死したのである」のように、「訪ねる」「将棋を指す」を並列させて一文に取め、後付で理由説明をする流れが一般的だろうが、ごく短い文を接続語句で繋いだことで緊張は保たれ、余計な感情の入り込まない表現となっているように思う。

J ——全く、妙なことになっちゃった。

大寺さんは細君の死の前後の話を簡単にした。もう何人もの人に話したから、云うことは殆ど決っているのである。

——兎も角、死ぬにしてもちゃんと順序を踏んで死んで呉れりゃいいんだけど、突然で、事務引継も何もありません。うちのなかのことが、さっぱり判らない。

——馴れる迄は、たいへんだね。

——挨拶無しに死ぬから困ります。

大寺さんは死んだ細君に腹を立てているみたいな口を利いた。

甲間に訪れた米村さんと話す場面である。細君の突然の死を、「順序を踏んで」「事務引継」「挨拶なし」といった比喩を交えてユーモラスに語ろうとするのが、却って困惑や悲嘆を伝える。三人称の大寺さんのことだから「口を利いた」と言い切っても自然で、これが一人称だったら「僕／私はまるで、死んだ細君に腹を立てているみたいな口を利いてしまった」のような、ある種の感情の入った文末になっただろう。

K それは、大寺さんの家の庭にある、ちっぼけな池の姫睡蓮が一輪初めて白い花を開いた日で、細君が死んで一ヵ月ほど経った頃である。

重要な事柄が、むしろ後述されている。「それは、大寺さんの細君が死んで一ヵ月ほど経った頃で、家の庭にある、ちっぼけな池の姫睡蓮が一輪初めて白い花を開いた日である」が本来の順序だろうが、配置を逆にすることで、むしろ読者はどきりとさせられる。

L ——あの猫、死んだんじゃないかしら？

上の娘も同意見らしかった。のみならず、あの猫は案外たいへんな婆さん猫だったので、それで凶凶しかったのだろう、という新説を出して大寺さんを驚かせた。パリジェンヌが婆さんでは面白くも何とも無い。

大寺さんが勝手に「巴里の御婦人」「パリジェンヌ」と思い込んでいたのだが、それにしても「婆さん」では印象が全く異なってくる。「パリジェンヌが婆さんでは興醒めだ」でもよさそうなものだが、ここでもAやCと同じく「面白くも何とも無い」という《反対否定》に副詞「何とも」で強調した表現となっている。

M 大寺さんの二人の娘は、上が大学生で下が高等学校に行っている。細君が死んだ後、二人で何とかやれそうかと訊くと、何とかやれそうだと云う。それが意外に順調に進行しているから、大寺さんもやれやれと思っ
ているのである。それに、二人とも暢気な方だから、余りくよくよしない。
それで、大寺さんも吻としている。

妻を亡くした夫というだけでなく、母を亡くした娘たちの父でもある大寺さんの心境を長く語ろうとはせず、「やれやれ」「吻」という感動詞一語で端的に表している。これは娘たちについても同様で、「それが意外に順調に進行しているから、大寺さんも一安心だった。それに、二人とも暢気な方だから、何かあっても尾を引かない。それで、大寺さんも肩の荷が軽くなった」などとするよりも、あっさり軽い味わいになる。これは破線部の、父の問いかけに娘たちが《おうむ返し》するやりとりにも言えることだろう。

N ——おい、おい。

大声で細君を呼ぼうとして、大寺さんは家のなかに自分一人なのに気附いた。

——蜻蛉が卵産んでるらしいぜ。

大寺さんはそう云う心算だったのである。大寺さんは蜻蛉を見ながら、何れその裡慣れるだろう、と思った。それから、米村さんはこんなときどうしているかしらん？と考へたりした。

冒頭、「妙な猫」の出現に面食らって、

——おい、おい。

大寺さんは大声で細君を呼んだ。

とある、その場面とほほ同様な表現がここで再現される。大寺さん自身の思いと、同じ境遇である米村さんへの思いとが、ごく自然な連想で淡々と並べられている。「考へた」と言い切らず「考へたりした」と緩めたもの言いになっているのにも、ほんやりと巡らされる大寺さんの思いが窺われる。

O 墓の前には線香の束が二つ立っていて、白い煙が秋の風に疾く流れる。

「墓の前に立てられた二つの線香の束から立ち上る白い煙が、秋風に流されて行く」とでも書くのが一般的ではないか。受身を一切用いないことで、必要以上にしゃしゃり出ない、どこまでも引いた語りが守られる。ささやかだが非凡な一文となっている。

P 自宅近く迄帰って来たときはもう夕暮近くなっていた。

大寺さんは吃驚した。

例の猫が飼主の家の戸口に、澄して坐っているのを発見したからである。大寺さんは二人の娘に注意した。娘達も驚いたらしい。

——あら、厭だ。あの猫生きてたのね。

——ほんと、凶凶しいわね。

この際、凶凶しい、は穩当を欠くと大寺さんは思った。しかし、多少それに似た感想を覚えないでもなかつた。

接続語もなく、「……ので吃驚した」と理由を先に示すのでもない。その

ため、読者も大寺さんの驚きを共有できる。また、ここでわざわざ「飼主の家」と断ったり、「穏当を欠く」との大仰な表現を用いたり、「それに似た感情」や「覚えなくてもなかった」といった遠回しな言い方を多用したりするところに大寺さんの複雑な心境が窺われ、何とも言えない滑稽さを生み出している。

Q —やい、こら。

太寺さんは猫を睨み附けた。猫は知らん顔をして横を向いた。そのとき、家のなかから誰か覗く気配がして、女の人の声が出た。

—あら先生、今晚は。

—今晚は。

大寺さんは無然としてそう云うと、ひどく仏頂面をして歩き出した。

大寺さんと猫の様子が、対になって描かれる。「この尻軽猫め、いまはどこに別荘を拵えたのか？」との思いから、「一言、猫を窘める心算」で声をかけたのに、猫にはそっぽを向かれ、飼主に見つかってしまう。「無然」も「仏頂面」もいまいましさ、気まずさ、そして照れ隠しの表情であろう。読者の脳裏にはこの場面が容易に浮かび上がり、思わず笑みを誘われることだろう。

4 おわりに

ごく淡い水彩画のような、あっさりとした筆致である。押し付けがましいところは一つもなく、軽やかで、呻吟しながら書かれたような気配は微塵も感じない。伸びやかな筆に任せて短い時間でものさされた印象を与えるが、書き「流し」たり書き「飛ばし」たりしたものは明らかに次元が違う。例えば、前項で見たBの後半部分を書き直してみよう。

【原文】 捕った鼠を啜えて、細君の坐っている直ぐ傍を通り抜けたから、細君は吃驚仰天して悲鳴を発したのである。猫が鼠を捕るのは当然のことかもしれぬが、他人の家に上り込んで鼠を捕る猫がいる

とは、大寺さんも考えなかった。大寺さんの家には鼠がいた。近所の家では大抵猫を飼っているらしく、鼠共は大寺さんの家に避難所を見出していたのかもしれない。従って、猫にとっては大寺さんの家は恰好の獵場だったのかもしれない。

【代案】 捕った鼠を啜えて直ぐ横を通られたからたまらない、細君は吃驚仰天して悲鳴を上げたのだった。猫が鼠を捕るのは当然のことかもしれないが、他人の家に上がり込んでまで捕るものか。近所には猫を飼っている家が多らしく、うちは鼠にとって恰好の避難所らしかった。つまり、猫にとってはお誂え向きの獵場というわけだ。

代案をつくるにあたりまず落としたのは「細君」「大寺さん」「猫」だった。いかにも冗長に見えたからだ。その結果確かに情報は整理され、字数も減ってすっきりした見た目になっているが、どこことなく説明臭が強くなった印象を受ける。

ものごとを文章化する際、人は時として本来の話の流れを解体し、意図的な入れ替えや並べ替えも辞さない。「生」のままでなく、取捨選択を経てわかりやすくなると考えられているが、文章とは議事録や報告書のような「実用」目的や、新聞・雑誌のように字数制限を伴うものばかりではない。考えながら話すことで頻出することばはある程度切り落とす必要があるが、ものによってはこの順序を丁寧に辿るマーカーとなり、読み手の自然な理解を促す役割を果たしているのではないか。ごく日常的な営みをすくい上げ写し取るこのような小説の場合は、呼称の繰り返しも無駄なばかりではなく、むしろ複数の登場人物を活写する助けになっているのだろう。

夏目漱石は繰り返しを多用する書き手だった。「草枕」を例に採れば、

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。
兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安いところへ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画ができる。

では前文末尾の「住みにくい」を後続文頭に「住みにくさ」と名詞化して引き継ぎ、

あの鳥（雲雀、筆者注）の鳴く音には瞬時の余裕もない。のどかな春の日を鳴き尽くし、鳴きあかし又鳴き暮らさなければ気が済まんと見える。其上どこ迄も登って行く、いつ迄も登って行く。

では「鳴く」の後にそれぞれ「尽くす」「あ（明）かす」「暮らす」を足して微差のある複合動詞をつくり、また「どこ迄も登って行く、いつ迄も登って行く」と対句的な表現を重ねる。

現代の感覚では多少くどく感じるが、今でも落語や芝居の台詞ではごく当たり前に見受けられる表現形式だ。音声の語りは、活字のようにもう一度戻って確かめることができない。代名詞に落とし込んで省略してしまうことで聞き手を置き去りにしないためには、こうした繰り返しの連鎖が思いのほか役に立つのだろう。

漱石から見れば孫のような世代の小沼だが、同じ間合いは彼の文章にも生きている。呼称の多用然り、母を亡くした娘たちとの会話然り、微に入り細を穿つもの言いではなく、訥々と繰り返しつつ語る。そんな彼が投影された大寺さんは、何につけ「おいおい」と細君を呼び、図々しい猫に腹を立てながらも乱暴には扱わず、病妻を抱えた友人を思いやっても立ち入ろうとはしない。小沼の——そして大寺さんの、あっさりとして軽やかで、押し付けがましきとは無縁の性格はそっくりそのまま、この作品の文体に著されているのである。

〈参考文献〉

- 浅野鶴子編（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店
 阿刀田稔子・星野和子（1995）『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社
 尼ヶ崎彬（1988／1994）『日本のレトリック』筑摩書房／ちくま学芸文庫
 天沼寧編（1974）『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
 池上嘉彦（1975）『意味論』大修館書店
 加藤典洋（1996）『言語表現法講義』岩波書店（岩波テキストボックス）

- 佐藤信夫 (1978/1992) 『レトリック感覚』 講談社/講談社学術文庫
佐藤信夫 (1981/1992) 『レトリック認識』 講談社/講談社学術文庫
佐藤信夫 (1986) 『言述のすがた』 青土社 (後に『わざとらしさのレトリック』
(1992) 講談社学術文庫へ)
飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』 東京堂出版
中村明 (1977) 『比喩表現の理論と分類』 (国立国語研究所報告57) 秀英出版
中村明 (1977/1995) 『比喩表現辞典』 角川書店
中村明 (1979) 『感情表現辞典』 六興出版 (後に中村明編 (1993) 『感情表現辞
典』 東京堂出版へ)
中村明 (1991) 『日本語レトリックの体系—文体のなかにある表現技法のひろが
り』 岩波書店
中村明編 (1993) 『感覚表現辞典』 東京堂出版
中村明 (1993/1997) 『名文』 筑摩書房/ちくま学芸文庫
野内良三 (1998) 『レトリック辞典』 国書刊行会
野内良三 (2005) 『日本語修辞辞典』 国書刊行会
山口仲美監修 (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』 講談社